

Letters
Arpak

レターズアルパック

VOL.219

ISSN 2432-5295

お正月

C O N T E N T

- ◆【お正月】…01～04
- ◆今、こんな仕事しています…05～07
- ◆arpak spirits…08
・八瀬野外保育センター
- ◆近況&イベントのお知らせ…09～10
- ◆まちかど…裏表紙
・謎の刻印を探せ!

羽根つき 地域再生デザイングループ／石井努

我が家では、年末から買い出し、大掃除、年賀状書き、久しぶりに会う人との飲み会なんかをとお正月に突入し、元旦から夫婦の各実家のあいさつ回り、挙句の果てにお節の食べ過ぎ等、インドア系ルーティーン連続となります。

そのうち、運動不足から、初詣に出かけることになりませんが、その時に「羽根つき」セットを持ち出すことが、ここ何年か続いています。

我が家のメンバーは、何等かのラケットスポーツ経験者のため、違和感なく羽根つきを楽しむことが恒例になりました。ルールもよく知らないまま、我流の打ち合いが続くだけです。「日本文化」×「スポーツ」を感じつつ、一年間怪我なく？健康に気を付けて頑張ろうという気持ちになります。本年もよろしく願いいたします。

お正月で欠かさないこと 総務部／近江篤

アルパックに入社して初めてのお正月を迎えることになりました。昨年より職場が変わりまた元号も平成から令和に変わり、今年のお正月はいつも違う環境で迎えます。

毎年、お正月で欠かせないことがあります。それは私と妻互いの実家に必ず帰省し、「家族4人（本人／妻／子2人）が元気である姿」を報告することです。また互いの両親の健康状態を再確認する絶好の機会ともなります。

医療技術の発展と新薬開発等で平均寿命が長くなる昨今ですが、私は平均寿命よりも健康寿命が長くなっていく日本社会であって欲しいなど願っており、そのためにも毎日・毎週・毎月・毎年の小さな積み重ねが、いかに大切であるかを、お正月を迎えるたび考えさせられます。

変わらない家族の日常 地域再生デザイングループ／小川直史

私は毎年元旦を家族と過ごします。過ごし方も、鼻を垂らしていた少年時代から、紳士的な振る舞いを身に付けて久しい26歳の本年まで、ずっと同じかもしれません。ご先祖様に挨拶をして、父の簡素な新年のあいさつを聞き、お屠蘇を飲み、お節を食べ、「やまのかみさん」と呼んでいる祠へご挨拶に伺う。変化したことと言えば、お正月の楽しみがお年玉から美味しいお酒や料理に移ったことでしょうか。お昼を過ぎると、まんぷくでほろよいのまま1日が終わります。こたつが暖かすぎてアイスを食べたりするなんてこともあります。贅沢ですね。

小さい頃はほとんど毎日家族と過ごす時間がありましたが、今では家族5人が全員そろう日は年に2回あるかないか。家族みんなで、のんびんだらりと過ごす1日ですが、これはこれで大事な家族の日常です。

あけましておめでとうございます。

2020年、字面からはなんとなくやわらかい感じのする新年が始まりました。

お正月は元来、その年の福德を司る歳神様（としがみさま）をお迎えする日本古来の行事だそうです。年始の過ごし方は世界を見わたしても様々ですが、新しい年の始まりをお祝いするという点はだいたい共通しているようです。

アルパックの職員の出身地も様々です。そしてキャラクターもそれぞれ異なるのでお正月の過ごし方も多様なはず。そこで今号ではテーマを正面から「お正月」とし、いつものお正月の過ごし方を紹介してもらうことにしました。

普段とちょっと違う側面もかい間見える小文を、各人の人となりを読み解く手掛かりにいただければ幸いです。

レターズアルパック編集委員会

お正月

静かな京都でのお正月 サステナビリティマネジメントグループ／伊藤栄俊

3年ぶりの京都での年越し、正月を迎えることになりました。東京で3回正月を迎えましたが、普段より少なくなるとは言ってもやはり、東京、私からすると人の多い正月でした。京都にいたころは、普段は観光客や学生が多く、喧騒に包まれている街が年末に向けて徐々に人が減り、次第に静かになっていく様子、年末年始の静かな京都が気に入ってました。除夜の鐘を聞きながら、静けさに包まれた街中を歩き、年明けすぐに初詣（さすがに初詣に行った先は人が多いですが）という流れが私の定番の正月の迎え方です。今年も日ごろの忙しさをしばらく忘れて、静かな京都でゆっくりと正月を迎えたいと思っています。もちろん、ちょっと時期をずらして実家にも帰ります。

「なあに？どうして？」 地域再生デザイングループ／岡崎まり

「お正月に関する絵本といえば？」と聞かれたら皆さんはどんな絵本を思い浮かべますか。かがくいひろさんの「おもちのきもち」や谷川俊太郎さんの「おしょうがつさん」など、日本の風習を楽しく子どもたちに伝える絵本が数多くあります。

12月末で3歳を迎える息子にとって、お正月はこれまで絵本の世界でした。今年のお正月はおせちや初詣、鏡餅や門松など本の中の世界が目の前に現れて大喜びしていることでしょうか。

何にでも興味津々の息子。最近は特に「なあに？どうして？」が増えています。絵本には日本の季節行事を子どもに分かりやすく伝えるものが数多くあるので、今年も一緒に色々な絵本を読んだり、体感しながら、季節ごとの「なあに？どうして？」に答えていきたいと思っています。



初詣は人気神社の“お山巡り”
公共マネジメントグループ／小阪昌裕

自宅から見える山麓に稲荷神社（地元俗称）があります。正月には全国各地から主に商工関係者の中高齢層の参拝者で賑わい、最寄駅の旧東海道線（現 JR 奈良線）の稲荷駅はその参拝目的で設置されました。初詣には、昔は腹ごなしを兼ねて山頂まで登る“お山巡り”をしましたが、クライマックスは小ぶりの鳥居が建ち並ぶ2列の道（千本鳥居）で、子どもはどちらの道の方が速いか競争したものです。かつての“遊び場”が、近年、正月とはいかないまでも、JR 駅前立地、入場料不要、時間規制無、年中無休、ご利益有で、不可思議な鳥居の色と列の“公苑”のパワーに魅せられ、若者と外国人の観光スポットとなっています。



お正月の過ごし方
総務部／節田さとみ

子どもの頃は、祖父母の元へ次から次に集まる親族にわくわくしながら、賑やかにお正月を過ごしました。女性陣は掃除に飾り付け、ご馳走の準備など、いつにも増して忙しそうでした。さて、今わが家が迎えるお正月は全く違ったものに。夫の実家ではホテルでのんびり過ごすのが恒例です。食事の心配もせず、好きな時に温泉に浸かる。両親との会話も必然的に増えます。一年間慌ただしく頑張った家族が、お正月くらいはラクしよう！とご褒美の行事となっています。形は変わっても、家族で穏やかに賑やかに新しい年を迎えたいという気持ちは変わりません。節目の行事ではいつも家族に支えられていることを感じますが、その中でもお正月は特別です。

元気の充電
地域再生デザイングループ／竹内和巳

私のお正月は、特にこだわりもなく、実家でゆったりとする、というのですが、昨年度は年末年始にかけてインフルエンザを発症してやむなくダウンしたため、今年こそは元気に過ごしたいな、と思っています。今年の実家まわりではいろんな動きがありました。ひとつには同級生に設計を依頼して、洗面・浴室の改修を行っています（今まさに工事中です）。親と同級生とでテレビ会議をしながら、便利なもんだなあ、とおじさんみたいなことを考えていました。おじさんといえば、今年は姪が生まれて、無事サンタクロースとお年玉の役割を与えられました。おじさんっていい仕事してるね、と言われるようにがんばります。



十津川村の正月の風物詩
建築プランニング・デザイングループ／高坂憲治

奈良県十津川村は全国一大きな村域をもつ村です。この村の谷瀬の集落では、11月末から自生の柚を活かした「ゆうべし」づくりが始まります。「ゆうべし」は、柚の実の果肉をくりぬき、そば粉、鰹粉、ごま、唐辛子、酒などを配合した特製の味噌を詰め、2時間以上蒸してから天日干しした十津川村の特産品です。谷瀬は集落全体で「ゆうべし」づくりに取り組んでいます。天日干しは約2か月、12月から1月にかけて集落内の干し場で行います。正月を迎える頃、山間の谷瀬の集落の干し場に「ネットに包まれた「ゆうべし」」がかけられている風景は、谷瀬の正月の風物詩となっています。



ちょっと遠出の初詣
都市・地域プランニンググループ／清水紀行

大抵の人はお正月には近所の氏神さんに初詣をされるかと思っています。私もそうです。しかし、ここ数年、氏神さん以外にも足を伸ばして初詣することが慣例となりつつあります。何がきっかけかは思い出せませんが、住吉大社に始まり、春日大社、伏見稲荷、伊勢神宮、熊野本宮大社・・・などどんどん距離が伸びています。さすがに正月三が日は避けていますので、そこまで混雑していないのですが、それでも結構な人出です。一旦、こういうことを始めてしまうと、家族から「今年はどこに連れて行ってくれるの？」という無言のプレッシャーが発せられます。と言うわけで何かおススメの初詣の場所があればご連絡をお待ちしております。

年取り
公共マネジメントグループ／田口智弘

岐阜の田舎生まれの私の年行事の一つに、大晦日の「年取り」があります。今まで「年取り」は全国共通の行事だと信じて疑わなかったのですが、知らない人のほうが多いと、このたび初めて認識しました(笑)。ネットで「年取り」+「県名」を検索すると、岐阜、長野、新潟、山形、青森、北海道、大分がヒットしました（意外とバラバラ）。江戸時代中期までは、大晦日の前日までに正月の準備を終え、大晦日当日は終夜眠らず、家族そろってご馳走をいただき、歳神を迎える習慣があった、そうです。また昔の年齢の計算はお正月が基準なので、家族全員の誕生祝いとして、特別なごちそうを食べるという意味もあったとか。家族の絆を決まって毎年確かめられる風習が残る地域って素敵だと自慢したくなりました。これらの道県出身の方は、「年取り」について諸事「うんうん」と頷いておられることでしょう。

今だからこそ

サスティナビリティマネジメントグループ／豊福宏光

大学入学までは実家の山口県下関市でお正月を過ごし、初詣や年賀状、おせち料理等と正月行事を行っていましたが、大学進学、就職と歳を重ね日々忙しくなるのと同時にお正月というお祭り感に少し抵抗が出てきてしまい正月行事を行うことが少なくなりました。お正月に抵抗が出た理由はとても簡単で、お正月＝家族のように感じていたところがあり自身の家族問題が理由で家族が集まることができなくなると、無意識のうちに遠ざけていました。しかし、ここ数年地域の仕事に従事することが多く（今は真庭市業務）地域の方とのふれあいや各地のお正月文化に触れる機会もあり、改めて日本の正月を勉強したいと思うようになり、これから各地の正月文化の違いを勉強していきたいと思っています。

ベトナム人のお正月の過ごし方に密着

地域産業イノベーショングループ／ホアン ゴック チャン

ベトナム語ではお正月は Tet (テト) と呼び、漢字起源の「節」から生まれました。テトは最大の祝日となり、旧暦にのっとって毎年日付が変わりますが、7～10連休は一般的です。テトは家族と一緒に過ごす時間だと伝えられ、多くの人々が帰省します。

「送故迎新」文化があり、人々は大掃除して家を装飾したり、新服を買ったり、各々がテトを楽しみにするので、年中の一番商売繁盛の時期です。お正月には、お供え物として自家製の Banh chung (ベトナム風ちまき) や五果 (カスタードアップル、ココナッツ、パパイヤ、マンゴー、イチジク) が欠かせません。ライフスタイルの変化により、Banh chung をスーパーで調達する家族が多くなってきましたが、私の家では、家族一丸でつくり伝統を続けています。大晦日には、一緒にお笑い番組を見て、年が変わったらお年玉を交換しながら新年のお祝いを伝え合い、神聖な時間を一緒に味わいます。

厄年にこそ跳ね上がる

地域再生デザイングループ／西村創

年齢がばれてしまいますが、今年から3年間厄年に突入いたします。「厄年」という考え方は、江戸中期には出来上がっていたそうです。平均寿命からして重い病に倒れてもおかしくない年齢だということで、人生の節目に病気や災難に気をつけるための庶民の知恵として、日常生活の中で伝統的に形成された宗教現象として生まれたものだそうです。宗教的な教理上の意味があるわけではないようですが、1月1日から始まるそうです。

本来であれば、何事もない平らな期間を望むべきなのかもしれませんが、自分の置かれている状況としては、やるべきこと、やりたいこと盛りだくさんの年齢ですので、厄年の期間にこそ跳ね上がるくらいの気概で臨みたいと思います。

棒鱈

都市・地域プランニンググループ／中井翔太

みなさんには、推しの御節料理などありますか？私が毎年楽しみでならないのが「棒鱈」です。これは、実家のある地域に由来する食材というわけではなく、極めて私的な原体験に基づきます。私の実家は、いわゆる「イナカ」。そんな地域にあって、少年・少女が深夜に出歩くことを公認される初詣などはまさに、一大イベントです。おめでたい雰囲気ともあいまり、羽目を外してよいと勘違いする中井少年他数名。結果、朝方解散する少年等は、各家庭で、叱責を頂戴し、元旦の寒空の下に締め出されるのです。そんな冷え切った身体で、口にしたのが祖母の炊く棒鱈と年を越し餅にその席を奪われた白米でした。その甘辛い味付けと寒風のもと凝縮された鱈の旨み、それを寛容に受け止める白米の蜜月関係を忘れることができません。

お正月の習慣

都市・地域プランニンググループ／長谷川育世

毎年のお正月に向けての過ごし方は、まず暖かい部屋でアイスを食べながら紅白歌合戦を見るところから始まります。そして12時を過ぎ、年が明けたら家族全員で近所のお寺や神社に初詣へと向かいます。私の実家の近所には、お寺や神社が合わせて8つほどあり、初詣の時には除夜の鐘の音を聞きながらお寺や神社を順番にお参りしていただくことが習慣となっています。

家を出てみると、このお正月の習慣は、普段顔を合わせることもない近所の方とあいさつをする機会でもあり、家族と一緒に時間を過ごす、大事な時間でもあるなと思います。年末年始は大阪ではなく、愛知の実家で過ごそうと思います。

お正月という区切り

都市・地域プランニンググループ／橋本晋輔

年々、お正月の特別感がなくなってきているのは私だけでしょうか。「もういくつ寝ると…」という歌がありますが、実家に帰るぐらいで、子どもも含め我が家ではそこまで特別なイベントではない雰囲気があります。2日にまちに出ると観光スポットは人で溢れ、お盆やGWと何ら変わらない気もします。共働き夫婦が増えるなかで、「休み」の要素が強くなったからでしょうか。新年を迎えたからといって、仕事も学年も変わるわけではなく、休み明けには、なに一つ変わらない日常が待っています。では、新年という区切りはなんなのか。お正月に対する思いは人それぞれだと思いますが、折角与えられた区切り機会なのだから今年も2020年の1年間という単位を少し意識して、過ごしたいなと思います。

年賀状

建築プランニング・デザイングループ／間瀬高歩

毎年ご無礼していますが、私個人の年賀状準備は計画的に進まないことが多く、仕事納めの後から大晦日、年によっては年始の深夜に書いています。このような私が送る年賀状が元旦に届くことは稀ですが、宛名は印刷ではなく、万年筆を用い手書きすることを継続しています。

宛名を手書きする一瞬は、十数年以上お会いできていない恩師、お世話になった方々、学生時代の友人など、過去の出来事を振り返り、相手方の存在を再び身近に感じる時間を持つことができます。年賀状は人の繋がりの時間軸を再整理するためにも価値あるものと思います。

今年も人との出会いを大切に、地域計画と建築に精一杯取り組んでいきます。よろしく願いいたします。

丸餅

建築プランニング・デザイングループ／増見康平

お正月といえば、様々なイメージがありますが、私は「おもち」、特に丸餅のイメージが強くあります。私の実家では、年末にもちつきを行い、約200個のおもちをつくりまします。その大半が丸餅で、今まで20年近く丸め続けてきました。10年目までは兄弟全員で丸め作業を行っていたのですが、兄弟が遠方に移り住んだため、私一人で作業をすることになってしまいました。ですので、ここ10年は、おもちの表面が固まり始める時間、また、おもちの持つ熱と私の熾烈な戦いとなり、こどもの頃の楽しさは皆目ありません。そんな戦いの戦果を平らげ、丸餅が尽きたら、またもちをつき、丸める。それが私のお正月です。

ゆっくりとしたお正月

サスティナビリティマネジメントグループ／盛川正和

お正月は実家に帰ってゆっくり過ごすことが多いです。

お正月らしいことはあまり積極的にはしません。地元が名古屋なので、以前は熱田神宮にお参りに行ったりもしていましたが、人が多いので最近あまり行きません。地元の友人と飲みに行くことも、お互いに社会人となった今では実施できないことが増えました。実家ではかつておせちを作ったりもしていましたが、いつからかスーパーのものとなり、最近はそれもかなり簡素なものになってきました。

また、実家の自分の部屋がかなり寒いのが最近きつく、実家で1月2日くらいまで過ごしたらさっさと下宿に帰り、ただただごろごろすることが増えました。

お餅からはじまる新しい1年

地域産業イノベーショングループ／武藤健司

岡山県真庭市・社地域ではじまった特産品づくりプロジェクト。その第一弾が「もち」で12月から販売を開始しました。家計消費をみると、2人以上世帯のもちの年間購入額は約1,700円、なんとその6割が12月に購入しています。お正月が近づくとつれ、スーパーや直売所にもち売場が作られることも納得です。また、もちには、ハレの日に神様に捧げる神聖な食べ物で、丈夫で健康、長寿を願う意味が込められています。お正月にもちを食べる風習も、平安時代に行われた歯固めの儀に由来するようです。調べるにつれて、これまで何気なく食べていたもちの見方が変わり、産地や価格、売り方、食べ方などいろいろと気になります。「きめ細かく、コシがあり、伸びもよく、煮ても崩れないもち」がおいしいと言われています。そんなスタンスの1年にしたいです。

我が家のルーティーン

地域産業イノベーショングループ／山部健介

我が家では、年末年始にかけてのルーティーンが決まっており、子どもの頃からあまり変わっていません。30日の親族での餅つきに始まり、31日はお墓掃除と紅白、1日はご先祖様への新年のご挨拶と寺社仏閣まわり、2・3日は箱根駅伝と親族会といった流れです。そういえば、お節料理の中身も同じ店、同じモノでこちらもルーティーン化しています。

毎年同じような繰り返しで代わり映えしませんが、習慣化してしまい、どれかが抜けると何となく落ち着きません。時代の流れに応じて、変革が求められる昨今ではありますが、この我が家のルーティーンがあってこそ、平穏無事な一年をスタートできるのかもしれない。

正月は大晦日から？

都市・地域プランニンググループ／山崎将也

私の地元、新潟では大晦日の夕食に、「年取り膳」といって、おせち料理の他、寿司やすき焼き、オードブルなどのご馳走が並び、少し早めに正月気分を味わえる習慣があります。年取り膳を食べ過ぎるので、年越し蕎麦が元日の昼食になることも良くある光景です。

また、初詣も除夜の鐘が鳴り始めた頃に出かける「二年参り」が割と一般的で（2年分の御利益や徳が得られると言われていて）、夜中にしんと雪が降る中、神社に向かう間に、新年を迎え背筋が伸びるような、スイッチが切り替わるような感覚になる瞬間が結構好きです。

地域によって年末年始の習慣は異なると思いますが、皆様はどのような大晦日を過ごされたでしょうか。

たつの市龍野地区が重要伝統的建造物群保存地区に 選定されました

鮎子田稔理：

建築プランニング・デザイングループ



地区の全景

夕焼け小焼けの赤とんぼ、
誰もが口ずさむことができるこの唄
の作詞者三木露風の故郷兵庫県たつ
の市龍野地区が令和元年12月に重要
伝統的建造物群保存地区に選定され
ました。

アルバックでは、平成30年度、保
存対策調査及び保存活用計画策定のお
手伝いをしました。

龍野の歴史は古墳時代に遡り、播
磨国風土記には相撲の祖とされる野
見宿禰の墓が龍野にあることが記さ
れています。

16世紀頃には赤松氏が龍野城を築
きます。鶏籠山や的場山といった山
を背後に抱き、揖保川を大きな堀に
見立て、扇状地には武家屋敷、沖積
低地の部分は町屋が形成され、自然
地形を見事に生かしたまちづくりが
行われました。近世には城は平山城
として整備され、戦国時代の歩みと
ともに城主が短期間で入れ替わりま
したが、江戸時代に入り脇坂氏が入
部し、脇坂氏約200年の治世下、
醤油醸造業や素麺製造業を保護育成
し、藩の産業や商業の奨励策もあり、



豆板ノ小路



下川原 昔ながらの糴製造所



クラテラスたつの

の醸造所もあり、様々な表情を見る
ことができます。また、映画「男
はつらいよ寅次郎夕焼け小焼
け」のロケ地としても知られ
ています。
今後は益々訪れる人も増えて
くると思われますが、古代から
この地で連続と続いてきた生活
の営みや歴史文化・産業を感じ
ながら、ゆつくりと散策してみ
てはいかがでしょうか。
(この業務は高坂憲治、和田裕
介、塗師木伸介も担当しました)

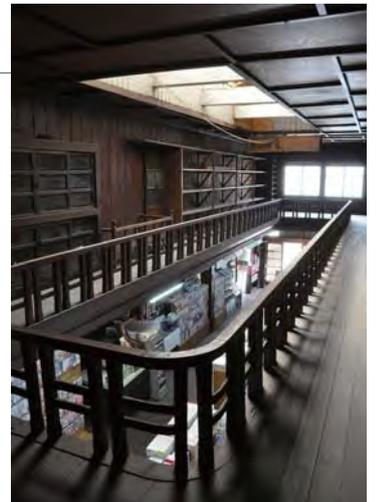
龍野城下町が発達しました。
今回重要伝統的建造物群保存地区
(以下「重伝建地区」)に選定された
地区を含む龍野地区は、中世からの
町割りが多く残されており、「龍野
惣絵図」など複数の絵図に現在の町
割りの原型が伺われます。
龍野の町の魅力は、江戸から昭和
初期の町家や武家屋敷、寺院など、
多様な建築物が混在していること
です。また、地区内の通りは、揖保川
に沿うように緩やかに湾曲してい
て、細い小路を通して見え隠れする
風景は、何故か歩く人に懐かしさと
安心感を与えます。

龍野の醤油生産は16世紀後半から
始まりました。揖保川の伏流水が鉄
分の少ない軟水であったため、仕込
みに使う塩との酸化作用が少なくま
のうすい淡口醤油が特産品となりま
した。素麺製造についても良質な小

麦や塩が豊富であったことや、揖保
川の水運が原料や製品の運送に大き
な役割を果たし、今では手延素麺「揖
保乃糸」は一大ブランドとして知ら
れています。昭和の初め頃までは、
醤油や素麺の製造所のほか、食料品
や衣料品の店が立ち並び、近隣から
の買い物客で賑わいました。
重伝建地区に選定されたエリア
内には、町家のほか、屋敷型住宅、
寺院、洋風住宅が点在し、町家を改
装したカフェや昔ながらの醤油や麴



冬はあったかいにゅうめん



上川原 江戸時代創業の老舗書店

東条川疏水を次世代の財産に！

豊福宏光：

サステナビリティマネジメントグループ

東条川疏水ネットワーク博物館
構想策定から令和2年3月で10
年を迎えるにあたり、次期構想
策定に向けて総会と井戸端会議
と称したワークショップを11月
に開催しました。

兵庫県東条川疏水流域は全
国でも特に雨の少ない地域で、
昭和8年に昭和池が完成、とし
て昭和26年11月23日に鴨川ダム
が竣工し、その後地域に水を届
ける水路が建設されました。

東条川疏水は鴨川ダムを主な
水源とした108キロメートル
の水路網で、加東市、小野市、
三木市の農地に農業用水を供給
するとともに一部は加東市と小
野市の水道水としても利用され
地域にとつてかけがえのないも
のです。しかし、近年過疎・高
齢化による地域農業の衰退や、
非農家の増加によって「水の恵
み」に対する認識が薄れつつあ
ります。そんな中「地域の手で
次世代のために水の恵みを活か
す」活動が必要であると考え、
平成24年に『東条川疏水ネット
ワーク博物館構想』が策定され、

そして平成27年には地
域全体を大きな博物館
としてとらえ、地域内
の施設や活動が展示物
であるという考えの元、
『東条川疏水ネットワー
ク博物館』がオープンし
ました。地域全体で疏
水について学び、財産



総会



井戸端会議

として活かし、次世代に引き継
いでいくことを目的としていま
す。この間、構想実現に向け疎
水めぐりや聞き書き、サイン看
板整備などの取組を行ってきま
した。そして、昨年11月23日『東
条川疏水の日』に今後の取組の
方向性を示すべく総会と井戸端
会議を開催しました。

総会では、関係団体等が60名
近く参加し、これまでの活動の
振り返りと共に次期構想策定に
向けた共有が行われ、また井戸
端会議では行政、関係団体、地
域の方々が入り混じり、疏水に
対して率直な意見が飛び交い
ました。取組を開始して約10
年が経ち、地域の方々が疏水の
大切さを認識し始めていること
は実感しましたが、実際に次世
代に伝えていく為の行動を起こ
すところまでは至っていないと
感じ、意識を定着させていくこ
との難しさを感じました。地域
の人々が東条川疏水に誇りを持
ち、自ら今後の取組について考
えていけるようなきっかけづく
りを模索していきます。

災害時のジレンマについて考える ～クロスロード・ゲーム～

清水紀行：

都市・地域プランニンググループ

過年度より、小平市小川西町
3丁目地区で「防災」を軸と
したまちづくり支援に関わっ
ています。

当地区は「防災都市づくり推
進計画」（東京都）において木
造住宅密集地域に抽出されまし
た。しかし都心部に比して密集
市街地としての印象は希薄で、
住民も密集市街地改善が喫緊の
課題という認識には至っていな
い状況です。そこで今年度は住
民の防災意識の啓発に係るプロ
グラムにも取り組んでおり、そ
の一環として「クロスロード・
ゲーム」を実施しました。

「クロスロード・ゲーム」は
阪神・淡路大震災で問題となっ
た「災害対応のジレンマ」をカー
ドゲーム化（矢守教授（京都大
学）達により開発）したもので、
簡易なシミュレーションを通じ
て防災意識を育むことができる
ものとして知られています。紙
面の都合上、ゲームの詳細は割
愛しますが、一番の特徴は「答
えに正解は無い」という点です。
例えば、「母親の立場で考えて
ください。安全の診断が下りた
避難所暮らしは余震が続く中で
は安心だが、最近風邪が大流行
し始めた。幼いわが子に風邪が
うつるのではと心配。ここでは
あなたは避難所を出て半壊状
態の我が家に戻る？ Yes（戻
る）か No（戻らない）か」と
いう設問があります。当日は



「No」の方が過半数を占めま
した。しかし、「全壊じゃない
から自宅に戻っても大丈夫で
は？」「風邪でなくインフルエ
ンザやノロウイルス等であれば
家に戻るかも…」といった意見
がありました。このように震
災時の経験を踏まえ推奨すべ
き「答え」はあるかもしれませ
んが、その「答え」が次の災害
時にも「正しい答え」とは限ら
ないという点が肝となっていま
す。参加者の多くは「人の意見
を聞いて、そういう考え方も
あるのか」という気づきがあつ
た。「災害に備えて事前に話し
合っておくことの大切さを知れ
た」という感想を持たれたよう
です。気軽にできる内容なので、
興味を持たれた方は是非、体験
してみてください。

※「クロスロード・ゲーム」は
京都大学生活協同組合のwe
bサイトより購入可能です。

官民連携による産業団地開発に取り組んでいます (加古川水足戸ヶ池周辺地区まちづくり協議会のチャレンジ)

岡本壮平：

都市・地域プランニンググループ

兵庫県加古川市の中南部、市街化調整区域に位置する野口町水足地区で、官民連携による産業団地開発を支援しています。

「戸ヶ池」は農業用ため池ですが、都市化の進展に伴い本来の役割を終えています。草木の繁茂や悪臭、害獣の棲み着きなど生活環境問題を生じ、ため池廃止による抜本解決が求められていました。隣接する農場では、移転・売却の意向がありました。一方、加古川市では地域創生戦略において企業誘致・働く場の確保を重視するものの新たな産業用地不足が悩みでした。こうした3者の状況・思惑が一致するものとして、産業団地開発が発意されました。かれこれ5年以上前のことです。

その後準備期間を経て3年ほど前にまちづくり協議会が正式発足し、市の活動費補助と自己資金を元に可能性調査を実施し、一定の可能性を見出す中でまちづくり構想を立案し、地権者等の合意形成に取り組んできました。昨年4月には、「事業化検討パートナー企業」を募集・選定し、技術的・資金的支援を受けて調査・計画の詳細化を進めています。

産業団地開発は、従来は自治体や土地開発公社などの公的団体による開発事業が主流で、近年はPFIなどの官民連携手法の導入が盛んですが、本地区は、



草木が繁茂している戸ヶ池が産業団地に生まれ変わる日も近い

地元主導型の官民連携事業と言えるものです。すなわち、地権者や地元の団体等がまちづくり協議会を組織し、地元の問題として損得なしに労をとって事業推進の中心を担い、行政も公的位置づけを与えて支援を惜しまず、パートナー企業との協働のもと、民間開発事業者による開発行為を適切に誘導して産業団地を開発しようとするものです。事業自体は民間による直接買取と開発行為というシンプルなものですが、まちづくり協議会方式で土地売買を含む事業化まで持つていくこうとする所が特徴であり関係者の苦勞する所でもあります。

今後、地権者の合意を得て、開発事業者の公募・選定に取り組む予定ですが、これまでの水面下の努力が実を結ぶ日も近づいてきました。まちづくり協議会やパートナーという仲間とともに、大きな期待を胸に、一步步つ前進を続けたいと思います。

ヒトと企業、大学、技術を繋ぐ仕組みづくり ～学生ビジネスアイデアコンテスト&オープンイノベーションピッチ～

高野隆嗣：

地域産業イノベーショングループ

私たちの仕事の範疇は、調査・計画に関わることはもとより、事業化支援まで多岐に渡ります。中でもひと昔も前から特に増えているのが、ヒト、企業、大学、技術、そして地域を「繋げる」お仕事です。

街づくりの分野でもお馴染みですが、今回は産業振興に係る催しを2つご案内します。

一つ目は、令和2年1月13日に最終審査会を開催する「開放特許等を活用した学生ビジネスアイデアコンテスト」です。開放特許とは、企業等が保有する特許の一部を他社に対して使用可能にしたもの。近年では、大企業を中心にその利活用が進んでいます。これら公開技術情報と大学生の柔軟な発想を融合し、新たな商品・サービスを企画、その事業化に向けたビジネスプランを競うものです。

第2回目となる今年度は、10



大学・30有余のチームエントリーを得て、第1次審査を通過した11チームが最終プレゼンを行います。ビジネスにイノベーションをもたらず開放特許の可能性と、若い感性による斬新な提案に、私たちも大いにワクワクしています。事前申込を頂ければどなたでも観覧可能です(左のチラシ参照)。

二つ目は、同じく令和2年1月21日に開催する「オープンイノベーション・チャレンジピッチ2019 in関西」です。大・中堅企業が、自社のオープンイノベーション戦略や技術ニーズを発信し、産学官連携による技術革新を目指すものです。こちらの参加対象は産学官連携を推進する大学・高専、公設試や産業支援機関、金融機関、自治体の皆さん限定です。

いずれも弊社が近畿経済産業局事業の事務局を勤めており、詳細はWEBでご覧頂けます。新しい年の初めに、若々しい発想や最前線の技術ニーズに触れる機会、是非お出まし頂ければ幸いです。



※アルパック歴の浅い職員が、アルパックのエポックとなったプロジェクトの現場を創業者の三輪泰司と共に訪れてアルパック・スピリッツに触れ、その一端を三輪自身の言葉とともにみなさんにご紹介します。

遠藤真森

「ご縁のはじまりは京都府保育研究会からでした」

戦後、子どもを持つ未亡人は、働くにも我が子を預ける場所がありませんでした。昭和22年、児童福祉法(厚生省)、同23年、「保育要領」(文部省)など法制が整い、京都では、お寺や教会が保育を引き受け、保育園の数は足りるようになりました。京都市は昭和27年に「勸奨交付金」制度を設け民間保育園支援を始めました。しかし、厄介になっているお寺は、築180年も経っていたりしています。グラツときたらたいへん。

昭和42年、だん王保育園の信ヶ原良文師(保育園長会長)に京都府保育研究会での講演の機会を与えていただきました。三輪36歳、東京で河野通祐先生に児童福祉施設を学んでいました。

「トイやユカの修繕では、何処にお金が消えたかわからない」

講演では、プールして頼母子講方式で集中的にやりましよう提案したそうです。翌43年3月、103ヶ園の加入で保育事業団設立、藤本真弘初代理事長。共同募金の資金も加え、6月に42年度分5ヶ園に配分。藤本先生、北野保育園の御厨えみこ先生と、自転車振興会、日本船舶振興会や馬主協会などへ助成をお願いに行ったそうです。10年も経つと、京都の保育園は一新しました。

「八瀬野外保育センターは、保育園の思いを受け誕生した」

もう一つの願いは、個別園にはない宿泊保育の場と、照明・音響設備の整ったホールでした。八瀬野外保育センターは、昭和45年「万博の年、「幼児に土と緑を」をスローガンに

できました。比叡山へ上がるケープルカーの左手に拡がるセンターは、京都市が土地を買い、無償で保育園連盟に貸し、連盟の園長・保育士がボランティアで運営しています。

「どんな園をつくりたいか、保育士とともに保育を体験した」

ここには、藤本真弘先生、嶋本弘英先生はじめ、保育園長達の思いがこもっています。アルパックの社員は、入れ替わり立ち代わり、暗渠を掘り、タンポポを植え、池を掘り、そして施設づくりに働いてきました。昭和47年、尾関は「からまつの家」を設計しました。求められた大きい遊戯場と宿泊にも使えるスペースという条件を守りながら、舞台のあるホールとして設計。椅子のない客席です。子どもが縦に寝るのにちょうどよい幅で、ゆるやかな段になっています。舞台は、本当は段差がない客席とながったものにしたかったそうです。が、段の上上がることで子供の気分が変わるという情操教育的な観点と安全への配慮から、30センチメートル程度の低い舞台になっています。保育園の設計にあたって、一日入園し保育士と一緒に、保育体験をしたそうです。クタクタになって帰ってきて、「何で疲れた?」「オトや子どもの高い声や」。測ってみたら60ホン。なら、吸音や。天井で吸音しようや。夜間保育で大勢の子どもをお風呂に入れるのも大変。保育士がのぼせないよう小窓をといた具合でした。

建築プランニング・デザイングループの山崎は、「からまつの家」のリニューアルのお手伝いをしましたが、ホールの良さを残しながら新しいか

らまつを創造する、というお題をいただき、先輩たちの設計してきた施設の改築に苦労したそうです。OBの松井俊はアルパックに入社してから、河野通祐先生に師事しました。つまり三輪の弟子ですが、保育士と結婚し、大津で理事長として保育園2ヶ園を経営しています。

「センターの継続の背景にはハートウエア、すなわち奉仕の精神があります」

随林寺保育園園長でセンター運営委員長の戸津川聖信先生によると、センターの同時滞留定員は、3カ園150名程度。現在ほとんど定員いっぱいでお泊まり保育をされているそうです。来園者の増加で園同士が鉢合わせしない工夫や、家庭の設備近代化に対処して、洋便器への移行、子どもの安全のためのカメラ設置など、便利になりすぎないようにと悩みながら行っているそうです。

センターは今年で50年目を迎えます。何故、長く継続できるのでしょうか。これは、仏教・キリスト教系の園が多いことと関係があるそうです。アルパックは施設づくりでハー

ドウェアを受け持つが、保育士には保育活動を動かす「指針」ソフトウェア。それだけでない。ハートウェア、すなわち「こころ」がある。これがあつてはじめて施設はぐるぐる回る。センター創設以来、連盟顧問として児童心理学者の嶋津先生、植物学者の伊佐先生、そして三輪がボランティアで運営にいつてきたそうです。「ボランティアには無償の奉仕と先端を拓くという意味がある」そして何故、保育に熱中するか? 「そら、誰でもみな子どもやっ

たやないか。誰でも自分が住む地域のために奉仕するのと同じや」という三輪の言葉が非常に印象的でした。

◆◆◆ 今回の視察では、アルパックが保育園や幼稚園の建築に多く携わってきた経緯、そして、時とともに変化させるセンター利用者の要望に寄り添い生まれた様々な建築上の工夫を知りました。時代とともに建物に求められる機能は変わることがあります。その変化に継続的に対応していくことは、これまでもこれからも変わらず重要です。私たちの仕事は短い年月で区切りが来ることが多いですが、同じ場所に長く関わり観察を続けること、その場所にかかわる人の声を聞き続けることの大切さを改めて感じました。

◆◆◆ なお、今回の視察では、センターの紹介やPRのために行われる保育士向け恒例行事で、今年で36回目を迎える「落ち葉まつり」に邪魔しました。センターの近況などをお話しいただいた戸津川先生、落ち葉まつりスタッフの方々、大変お世話になりました。

[arpak と八瀬野外保育センター]

創設時より京都市内の多くの幼児施設設計に関わってきました。その関係からも深く、「幼児に土と緑を」を合言葉に、「八瀬野外保育センター」設立当初か施設整備管理のお手伝いをして



かつらの家

台湾のエリアリノベーション最前線！（その2）

昨年の11月に、毎年恒例になっている奈良女子大学と台湾の朝陽科技大学・東海大学の国際交流ワークショップの一部に同行し、高雄～台南～花蓮～台中における台湾のエリアリノベーションや地方創生の現場を視察しました。台湾でも時代を切り開く新しい発見と創造は、日本と同様に地方都市のまちなかや中山間地域で起こっていました。

海を眺められる倉庫群のクリエイティブ・センター(高雄)

高雄では、オランダのメカノー・アーキテクテンの斬新な高雄駅や衛武宮国家芸術文化センター、世界で2番目に美しい地下鉄の駅「美麗島駅」、LRTの整備など、クリエイターが参加した都市交通を中心とした再整備が大々的に進んでいました。また港周辺の約100年前に建設された大規模倉庫群や操作場跡地は、昔の面影を残しながらアート&クリエイティブ拠点や広大な公園などにリノベーションされていました。様々な世代が利用する新しい市民文化の交流、表現、憩いの場として、当日は同人誌とコスプレのイベントなどでクールジャパンをテーマに大勢の人で賑わっていました。今更ながら大阪築港のレンガ倉庫でのクリエイティブ活動の展開をそのまま進めていたら、今頃世界をアッと驚かせる拠点になっていたのではないかと残念です。

人々が楽しく集まるなつかしくて新しい街(台南)

高雄から鉄道に乗り約1時間で、「紅椅頭(赤いプラスチックの椅子)」の観光キャンペーンで有名になった約400年の歴史をもつ古都台南へ。今回は、エリアや建物をリノベーションして再生している新農街、正興街、藍晒図文創園区、林百貨店などを訪れました。店先の「紅椅頭」に代表されるように「多彩な食を囲んで赤い椅子に腰を掛け世間話をしているありのままの姿」を伝える都市戦略に、地方創生の鍵が隠されていると思います。週末だったこともあり、家賃が比較的安く魅力的で高感度な店が集積しているからか、どの地区も地元の方々と観光客で賑わっていました。

地震が続く石の街の酒造工場跡地再生における葛藤(花蓮)

高雄から約1時間の国内線プロペラ機で、台湾東部最大の街「石の花蓮」へ。東海岸に日本人が港を築き、日本から多くの移民を受け入れた都市の歴史を感じつつ、街中に残る日本統治時代に建設された約4haの酒造工場跡地をリノベーションした花蓮文化創造産業園区を訪れました。巧みに建物を残しつつデザインされたランドスケープを体験することが出来たのですが、



地震で閉鎖されている花蓮文化創造産業園区



台中旧市街地の廃墟ホテルのCOOLなコンバージョン

一昨年、昨年と続いた地震の影響で、現在建物内部は立ち入り禁止で見学することができませんでした。このまま解体されるのか、又はかなりの費用をかけて耐震改修するのか、台湾国民及び花蓮市民の葛藤が続くと思います。

大学と地域の連携によるエリアリノベーションとCOOLな廃墟ホテル(台中)

最後は、花蓮から約3時間30分の鉄道を乗り継ぎ、長陽科技大学・東海大学がある台中へ。今回の目的地は大学と地域とが連携したダウンタウンのエリアリノベーション。台湾において空き家率が最も高く、エリア全体が没落と廃墟化に向かっていった旧市街に、2012年に東海大学の建築系ゼミが、数十年放置された銀行跡をセルフリノベーションした拠点「中区再生基地」を構えて、さまざまなプロジェクトを提案し、実際に地域の方々と連携し行動、実践していました。全てのプロジェクトに大学が関与している訳ではありませんが、一昨年訪れた時よりも大幅にエリア全体が急激に動いている印象を受けました。

圧巻はSOFホテル。閉鎖して約20年間放置されていた廃墟ホテルを、外観にはほとんど手を入れずに、内装をニュージーランドの建築家がリノベーションしていました。写真にある青のボルシェが止まっているようにCOOLな連中がこのエリアに集まって来ています。宮原眼科は盛況で、二号店として第四信用合作社をリノベーション、台鉄台中駅周辺の東協広場は、現在、外国人労働者のコミュニティ拠点になっていて、「台中のリトル東南アジア」に。フィリピン、ベトナム、イスラムなどの様々な国籍の人々が集まり、周辺には各国のレストランやショップも集積しています。日本もさらに国際化、多文化共生が進み、都市の中にこのような様々な国のコミュニティセンターが出来るのではないのでしょうか。

追伸

今回は奈良女子大、台湾の朝陽科技大学と東海大学の先生方、学生の皆さんに大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。なかなか個人では行かない秘境地や対極のダウンタウンなど、最先端の地域づくりの課題を解決している先進地視察は、毎回、自分の視野を広げてくれる貴重な国際交流の場となっています。



高雄臨海部の倉庫群をリノベーションした駁二芸術特区



台南を代表するオールドストリート神農街

第19回適塾路地奥サロン「街から教わる地域デザイン論～アメリカ編」を開催しました。

絹原一寛
適塾路地奥サロン実行委員



12月6日の回は、大阪ガスの山納洋さんをお招きしました。メビック扇町などの企画・プロデュース業務に携わりつつ、日替わりで運営する common cafe、まち歩き Walkin' About を立ち上げるなど、関西の文化シーンを創ってきたプロデューサーで、つい最近まで1年間ボストン・ケンブリッジに滞在されていたことから、アメリカ東海岸都市のリアルな姿を聞く会となりました。

ボストン・ケンブリッジは、ハーバードやMITに代表される大学と医療機関の集積により大きく発展する一方、ジェントリフィケーションが深刻化。地価が著しく上昇し（一人暮らしのアパートでも月20万円近く!）、移民や低所得者、既存の商店が追い出される状況。その反動で、周辺近郊都市の中には移民の街に変貌するものも現れていました。印象的だったのは街の

スーパーで、並べられている食材でどのような人種の方が暮らしているかわかるということでした。こうした顕在化する経済格差が社会やコミュニティの分断を生んでいる状況を是正する政策として、低所得者向け住宅投資減税（LIHTC）を導入し、アフォーダブル住宅を民間投資で誘導しているようです。

ボストンから離れた郊外都市では、基幹となる製造業、自動車産業の構造変化・停滞の影響が尾を引いて、日本の地方都市のようにシャッター街や人気のない街中が目立ちます。

「Gateway City」という、交通利便性を高めて街中への投資を促す TOD 政策が積極的に進められていますが、「笛吹けど踊らず」で、ますますボストンなどの格差が拡大する事態に陥っていました。

テレビのニュースで見るアメリカからは全く想像もできなかった、諸都市の苦闘する様子に、いろいろと考えさせられる会でした。このアメリカ都市の話題を取り上げた書籍を、山納さんが翻訳し、来年に発売する予定だそうです。ぜひ、チェックしてみてください。

JIA 市民大学講座 2019 まちづくりセミナー「まちの価値を高める『景観デザインレビュー』を考える」が開催されました

坂井信行
都市・地域プランニンググループ

近年は多くの自治体で景観形成に関わる施策が実施され、またエリアマネジメント組織等による建築物や広告物のデザインマネジメントの事例も見られるようになりました。そうした中で、建築物の設計段階で専門家等が関わってデザイン協議を行う「景観デザインレビュー」が注目されつつあります。しかし、一般に設計者にとってデザインレビューは“やっかいなもの”として捉えられているのではないのでしょうか。

去る11月28日に日本建築家協会（JIA）近畿支部の都市デザイン研究会（筆者が参画）の主催で表記のセミナーを開催しました。このセミナーは景観デザインレビューが建築物のデザインの質、さらにはまちの価値を高めるものであることを確認しつつ、効果的な運用のあり方を考えることを目的とするものです。

スペースシンタックスジャパンの高松誠治氏からイギリスのCABEの取組の紹介を中心に基調報告をいただいた後、高松氏と関西大学の江川直樹先生のお二人をコーディネーターとするパネルディスカッションが

実施されました。パネリストには建築やランドスケープの専門家、エリアマネジメント団体や行政の景観担当セクションの方々にご参加いただきました。

議論の中では、行政によるデザイン協議だけでなく、エリアマネジメントとしての取組や専門家が責任を持って関わることの重要性などがメッセージとして発信されました。都市デザイン研究会では今後も継続的に景観デザインレビューについての研究を続けていくことにしています。



ラウンジ風にしつらえられた会場の様子（撮影：田籬哲也）



謎の刻印を探せ!

私は旅にでると必ずといっていいほど近代建築や土木遺構を探しますが、中でも人里離れた森林をかき分け、巨大な煉瓦づくりの遺構が目の前に現れると大きな感動に包まれます。

中村孝子：
企画政策推進室

現在は役割を終えた優美な煉瓦の馬蹄型のアーチなどの積み方、大小様々な形、レリーフなどを眺めると、よくぞ重機もない時代にこんなものを造ったと当時の土木技術者を尊敬します。また、隧道、治水施設、橋梁など煉瓦づくりの遺構に触れると時代を駆け抜けてきた語り部に出会った気分になります。

さて、数年前に何気なく眺めていた煉瓦に謎の刻印を見つけました。廃墟探検で落ちている瓦に刻印を見か



岸和田市内あちこちにある煉瓦の壁



過去に見つけた刻印(加古川市)

成型)され高品質で、同志社女子大学ジェームズ館や旧山口県庁舎、琵琶湖疏

けたことがあります。これは新たな発見でした。「タカコの知らない世界」がはじまります。早速、まち歩きで知り合ったマニアックな友達にたずねると岸和田で赤煉瓦ネットワークのイベント岸和田×泉州大会があるとのことでお誘いを受けました。

ワタシ的には、岸和田は、だんじり祭やNHK朝ドラ「カーネーション」で有名なことは知っていました。が、イベントに参加するまで煉瓦づくりのメッカであったことを全く知りませんでした。

岸和田煉瓦の関係者の講演によると、明治初期、日本各地で煉瓦の製造がはじまり、岸和田でも明治5年に岸和田藩士の山岡尹方が岸和田藩練兵場跡で煉瓦製造をし、岸和田煉瓦(キシレン)が誕生したそうです。

キシレンは、機械で製造(機械成形)する他社とは異なり、手で製造(手



写真：上 キシレンのクロス刻印
下 マニアによる測量風景

水、神戸異人館などに使われているとのこと。会場の展示には、全国から収集された謎の刻印がある煉瓦がたくさん陳列され、ものすごく興奮してしまいました。それぞれの煉瓦には、研究者による産地やメーカー、製造年、使用されている建物、採取場所、製法、サイズ、刻印の意味など詳細な説明があり、煉瓦の世界の奥深さを感じざるをえません。また、市内の煉瓦を巡るまち歩きでは、マニアの方と一緒に歩き、いたるところでキシレンの刻印(「X」セントアンドリュースクロス、山岡尹方がクリスチャンだったことによる)を見つけ、マニアによる刻印の洗礼を受けた気分になりました。

近年、倒壊による災害を未然に防ぐために古いブロック塀が姿を消しつつありますが、煉瓦の壁も同様です。現存するうちに刻印を探すという楽しみが増えたので、これからのまち歩きはさらに忙しくなります。

表紙写真：美しい曲線のアーチ橋 南禅寺水路閣/撮影 中村孝子

「レターズアルパック」は、ホームページからもご覧いただけます。



アルパック(株)地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
<https://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四條通高倉西入立売西町82 TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所 〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル17F TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所 〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 ユニゾ内神田1丁目ビル4F TEL(03)5244-5132 FAX(03)6273-7715

九州事務所 〒810-0802 (株)よかネット:福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128

ホーチミン 0908.CJ Building.2-4-6 Le Thanh Ton street. District 1 HCMC.Vietnam TEL+84(028)6255-6732 (ベトナム)



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
Kikitoペーパーを使用しています。